

# 1 地域・児童・学校の概要

## 1) 地域

内小友地区は、大仙市の最南端に位置し、南は横手市大森町に隣接した、雄物川と出羽山地に抱かれた平坦地（内小友地区）と丘陵地帯（中山地区）から成る。学区域は、南北5km、東西12kmと広範囲である。歴史のある全校文集の題名になっていて、なだらかな傾斜が特徴の「成島山」がそびえ、学校報「おともがわ」の由来となっている小友川が流れている。

また、秋田自動車道、県立農業科学館、県立大曲支援学校、大仙市総合公園、学校給食総合センター（スマイルランチ）等があり、新たな田園都市への中核地域として形づくられている。しかし、アクセス道路ができたことにより、交通量の増加と地区内の曲がりくねった細い道路状況により交通安全指導上の問題を抱えている。

地域の人々は、学校教育への関心が高く、とても協力的である。PTA活動、交通安全会活動、公民館活動、スポーツ少年団活動等も盛んであり、小学校の運動会も、内小友地区交流大運動会に組み入れられた形で実施されている。

## 2) 児童・保護者

今年度全校児童数は、74名で昨年度より2名減であり、20年前と比べて半減している。少子化が急激に進行しており、今後徐々に減少していくものとみている。

恵まれた自然の中で、児童は保護者や地域の方々に温かく見守られながら育っており、皆純朴で明るく、人なつっこい。諸調査から「自分にはよいところがある」と自覚している子が多いという特徴も見られる。集団登校グループや縦割りグループ活動によって異学年交流が進み、互いを思いやる気持ちも育っている。また、児童は内小友小学校を愛し、勤労意欲に富み、物事に真剣に取り組む。さらに、元気な体づくりをするため、「かけ足」や「なわとび運動」の継続により新体力テストの結果にも好影響を与えている。歯の健康・食育・基本的な生活習慣形成においても、家庭と連携し親子でチャレンジするようになっている。

全職員による研究を継続していることの成果が児童の学力に反映されている。しかし、諸テストの結果から、「読解力」「思考力」「表現力」を高める必要があることが判明し、研修を重ねている。特別支援学級在籍児童はもちろんのこと、通常学級で支援を必要とする児童に対しても個別の教育支援計画及び個別の指導計画に沿った指導体制を構築している。

約4kmで1時間かかる遠距離も含め、ほとんどの児童は徒歩で登下校する習慣が身に付いている。また、中山地区の児童（4名）はタクシー通学をしており、下校時刻や放課後等、下校時刻までの過ごし方に特別な配慮をしている。

保護者はサラリーマンがほとんどで、両親とも市内周辺に勤務している方が多い。学習参観やPTA事業への参加率は非常に高く、何事にも協力的である。

## 3) 学校

明治7年創立後、昭和50年4月旧内小友小と中山小の2校が統合し、内小友小学校となり、今年度で創立150周年を迎える。現校舎は、昭和49年建設で老朽化が進んでいるが、平成20年度、体育館と共に耐震補強工事が完了している。また、施設設備の整備として、トイレの改修と消雪用井戸の掘削が行われた。暖房器が1台毎の給油式であり、集中管理の配管式を要望している。令和2年度には普通教室へのエアコン設置工事が完了し、併せて、老朽化していた排水ドレン管の交換工事も行った。

平成7・8年の2か年にわたり文部省指定・県教委委嘱「心身障害児理解推進校」、平成15・16年の2か年にわたり文部科学省から「学力フロンティアスクール校」の指定を受け、平成16年には公開研究会を開催している。平成22年、地域に根ざした食育活動が評価され「東北農政局長賞」を授賞している。昨年度から県の「心のバリアフリー推進モデル地区における障害理解の推進事業」に指定され研究を進めているほか、10月には大曲仙北算数・数学教育研究大会の会場校として公開授業を予定している。

グラウンドは校舎に隣接しており、休み時間に遊ぶ子どもが多い。プールが老朽化しており平成28年度に一部改修工事（底面及び側面の防水塗装）を行った。体育館・グラウンドとも学校開放しており、スポーツ少年団や地域のスポーツ団体等の練習場所として利用度も高い。